

以前、私が園長をしていた幼稚園の卒園生に誘われて、世田谷にあるセント・メリーズ・インターナショナル・スクールのカーニバルに行ったことがあります。会場は大盛況で、歩くのもままならないほどの人出でした。そして世界各国の料理が安い値段で提供されていて、パキスタンのキーマカレーと、フィリピンのバーベキューと、アメリカのハンバーガーをおいしくいただいてきました。もちろん一緒に、ドイツとノルウェーとニュージーランドの、泡の出るやつも飲みました。

ハンバーガーを買うための行列に並んでいた時のことです。私のすぐ前には、中学生ぐらいのインターナショナルな男の子が並んでいました。するとその男の子のインターナショナルな友人が3人やってきて、英語で親しげに話しています。英語ですから、もちろん私には何をしゃべっているのかわかりません。そのうちに、後から来た3人の友人も行列に加わってしまいました。横入りということです。しかし私には横入りを注意する英語力がありませんから、怒りを押さえて黙っていました。

だんだんと列が進んで行くと、おそらく生徒のお父さんたちなのでしょう、目の前ではアメリカンな大人が炭火でハンバーガーを焼いており、その横でアメリカンな大人が注文を受けています。やがてインターナショナルな男の子たちが注文する番になりました。するとアメリカンな大人が言ったのです。「君達はちゃんと列に並んでいなかったじゃないか。並んでいたのは彼だけだろう。ハンバーガーを買いたいのなら、列の1番後ろから並ばないといけないよ」。するとインターナショナルな男の子のうちの2人が言いました。「僕たちはハンバーガーを買うつもりはないんだ。彼とは友達だから、一緒に並んで話していただけなんだよ」。アメリカンな大人が言いました。「それならいいんだけど、でももう1人の君は並んでなかったよね。仕方ないから売ってあげるけど、最初から並んでいた彼も一緒にペナルティーだ。次の人の順番を先にするよ。その後で注文を聞くから」。ということで、私が彼らより先にハンバーガーを手に入れることとなりました。

しかしどうしてわかったのでしょうか？ 彼らの会話の内容が。全部英語だったのに。

ある人が、この世での歩みを終えて召されていきました。その人は、聖書をよく読み、他者のためによく祈り、教会のために尽くし、世の中のために奉仕し、平和のために働き、人のために親切にし、そしてその生涯を終えました。その人が天国の門の前に立って中に入ろうとすると、管理人であるペトロに言われました。「ちょっと待ってください。順番があるのです。あなたよりも先に入ってもらう方がいますので」。その人はその場で待ちました。自分より先に天国に入る人とは、いったいどんな人だろうという興味もありました。やがて自分より順番が先の人や来て来たのを見て驚きました。何とそれは、教会に来たこともなく、聖書も読まず、祈ることもせず、隣近所に散々迷惑をかけ、人々から嫌がられていた人でした。その瞬間、立派だった人は怒りだしました。

それは怒るはずです。ハンバーガーでも怒るのに、天国ならなおさらです。もし寛容な人であったとしても、「神さまは情け深い方だから、彼も天国に迎えられるのは認めよう。しかし自分よりも先に入るのは許せない」、そんなふうに思うのではないのでしょうか。

きょうの聖書箇所でのユダヤ人たちの怒りとは、これに似た怒りだったのです。その怒りの発端となったのが、パウロの「神が自分を遠く異邦人のために遣わした」という言葉でした。その意味するところは、「神の恵みは外国人にも向けられている」ということです。これはユダヤ人にとって許せない言葉でした。

ユダヤ人にとって神とは、ユダヤ人を特別に選んでいる神なのです。それがユダヤ人の信仰であり、彼らの存在証明であったといえるでしょう。それなのに同じユダヤ人であるパウロが、許せない発言をしたのです。

ユダヤ人は神の教えとして、律法を何よりも大切にしてきました。律法を守り行うことこそ、彼らの生きる証しでした。彼らは頑張りに頑張りを重ねて、努力に努力を上乗せして、律法を守ることに生活のすべてを集中させていたのです。

ユダヤは小さな民族であって、いつも外国の侵略にさらされるという歴史の中を歩んでこなければなりません。けれども自分たちには神がいてくれる、律法を守ることで神は特別にイスラエル民族に恵みを与えてくれるという信仰によって、苦難に耐えてきたのです。諸外国による支配の歴史の中で、倒されそうになっても律法を拠り所として立ち上がり、自分たちの世代で立ち上げられなければ、子や孫の代に希望を託してきたのです。それができたのもすべて、自分たちが神から特別に選ばれているのだという信仰によるのであり、その信仰の証明としての律法があったからなのです。

それなのにパウロは、自分たちと同じユダヤ人でありながら、外国人も救われると言うのです。神がパウロを外国人のために遣わしたなどと言うのです。怒りは頂点に達します。パウロの話聞いたユダヤ人たちは、声を張り上げて言っています。「こんな男は、地上から除いてしまえ。生かしてはおけない」。ユダヤ人たちは上着を投げつけ、砂埃を空にまき散らすほどです。これは彼らの激怒を示すしぐさです。リンチの準備でもあります。

パウロとユダヤ人たちのやりとりは、アラム語で行われていました。ところがローマの千人隊長にはアラム語が理解できません。ハンバーガーの順番待ちなら理解できても、ユダヤ人の怒りの理由はわかりません。そこで、どんな理由でユダヤ人たちが激怒しているのかを調べるために、パウロへの鞭打ちを命じるのです。この鞭打ち刑は、ローマ人以外の外国人と奴隷に対して行われていたものでした。ところが、パウロにはローマ帝国の市民権があることが判明しました。ローマ市民に鞭打ち刑を行うことは法律で禁じられています。さらにローマ市民は、一定の尊敬を受ける権利を約束されているのです。結果としてパウロは、ローマの千人隊長のおかげでユダヤ人たちの手にかかることはなくなり、命を救われたのでした。

パウロに対するユダヤ人の怒りは、「生かしてはおけない」と叫ばせるほどの怒りです。しかしパウロは、ユダヤ人が救われないとは言っていないのです。律法を知らない外国人も救われると言っただけなのです。けれどもユダヤ教の排他的な信仰はそれを許しません。自分たちがすべてであり、自分たちと異なったものは排除しようとするのです。

きょうの聖書箇所を読んでいて、どうして人は自分と異なったものを受け入れられないのだろうと考えました。いろんな人がいて、誰にでも神の働きかけがある、それがイエスの福音です。それなのに、どうして人は違いを認め合えないのだろうかと考えました。

インターナショナル・スクールに初めて行った時に、そこは違いを受け入れることから始まり、異なったものを認め合える感性が育まれる場所なのかもしれないと思いました。肌の色、宗教や文化、習慣や常識、それらを越えていく感覚が当たり前となれば、もっと幅広く、人を受け入れていくことにつながるのかもしれないと考えたのです。そして、違いを受け入れ合い、異なったところを認め合うことの中から、新しい世界が、心の通じる世界が見えてくるのだろうと思いました。

そんなことを考えているうちに、違いを越えて受け入れることを人生のテーマとしていた人を思い出しました。

同志社大学神学部の大学院を修了した孝は、渋谷にある東京山手教会の伝道師となりました。50年近く前のことです。若い伝道師は、特に教会の青年たちから歓迎されました。東京山手教会の礼拝堂は750人ほどが入れます。当時は200～300人の青年たちが礼拝に出席するようになっていったそうです。親身になって青年たちの相談にのり、自分のことのように悩みを共有し、一緒によく遊び、何でも語り合う姿勢が、青年たちから受け入れられていったのでした。教会は青年伝道の最盛期を迎えました。しかしその中から、洗礼を受ける者はあまり現れませんでした。なぜなら青年たちは、孝から洗礼を受けたいと願い、孝が洗礼を授ける資格を得るまで待とうと考えていたからです。

その後、孝は突然に東京山手教会を辞任することになりました。主任牧師の強い勧告と主張によるものでした。孝の仲間や青年たち、そして教会員の何人かは、それを主任牧師によるひがみと嫉妬によるものだと受け止めていました。

孝は、群馬県にある桐生東部教会の牧師となり、その時代に結婚をしました。その後、33歳の時に小樽公園通教会の牧師に就任しました。そこで長女の圭が与えられました。その圭は、重い知的障害をもって生まれてきました。

圭が大きくなるにつれ、孝にとって牧師という仕事が壁になりました。牧会に専念しようとするれば、圭に関われる時間が少なくなってしまいます。孝は思い悩んだすえ、教会を辞める決意をしました。そして小樽公園通教会を辞任し、北海教区の幹事に就任しました。牧師という不規則な仕事ではなく、勤務時間の決まっている教区幹事という仕事を選んだのです。孝は広い北海道中を、各教会を訪ねて回りました。そんな孝には、たくさんの仲間ができました。それは同時に、教会という範囲を越えて、圭と同じように障害をもって

いる人々との、たくさんの出会いともなっていました。

そして、いろいろな教会の様々な問題に関わるうち、孝の心の中には1つの夢がふくらんでいきました。

圭が16歳の時、孝の家族と一緒に食事をする機会がありました。その頃の圭は、共同作業所で割り箸の袋詰めの仕事をしていました。1日の仕事量は、15本の割り箸を袋に詰めるのが精一杯とのことでした。しかし圭の母親はこう言っていました。「本当にわずかなお給料だけど、それでも親戚中のいとこ達の中で、圭が1番最初に社会人になって、自分で稼いでくるようになったのよ」。そう言った母親の顔は、とても嬉しそうでした。

やがて孝は、10年間務めた北海教区幹事を辞任しました。それは夢の実現のためでした。その夢とは、違いをもつ様々な人々が集うことのできる信仰共同体としての教会を形成することでした。障害を持つ人が当たり前に来て、教会の一員として共に生きていく。人々が違いを受け入れ合い、異なるところを認め合うことの中から、新しい世界が、心を通じる世界が見えてくる。そんな教会をつくりだしていくことが、孝の夢だったのです。

1987年、孝はそれまで牧師がいなかった島松伝道所の牧師に就任しました。教会から招聘されたわけではありません。無理やり、島松伝道所に押しかけて行ったのです。島松伝道所が小さな群れであり、牧師への謝儀・給料も払えないことは知っていました。でもあえて、そこを選んだのです。

しかし牧師への謝儀は別としても、お金がなくては教会は立ち行きません。孝は、全国からの献金によって教会形成をすることを考えました。妻の博子はそれに猛反対しました。「満身に食べられなくてもいい。自分が新聞配達でも何でもする。だから自分たちだけががんばってみましょう」。孝は言いました。「きみは自分の力に頼っている。もっと神さまに頼ろう」。やがて、全国の諸教会から献金が届くようになりました。

孝の働きは順調にスタートしました。教会員も増えていきました。障害をもった人々も、遠い所からでも教会に集まるようになり、本当の意味でのバリア・フリー、孝の夢が実現していきました。それは圭のためにと願っていたことでしたが、圭を通して実現していったことでもありました。圭を通しての出会いがたくさんあり、それが孝の大きな喜びでした。

圭は重い知的障害です。言葉を話すことができません。ある時、孝はなんとなく圭の様子がおかしいことに気づきました。医者連れて行くと、圭の眼は失明寸前でした。すぐに手術、そして入院です。圭が退院するとまもなく、妻の博子がくも膜下出血で倒れ入院しました。そして博子が退院するとすぐに、再び圭が今度は心臓の手術をしなければならなくなりました。その後、妻の博子が2度目の入院。その博子が帰って来ると、久しぶりに落ち着いた家庭がもどってきました。

しかし、それはつかのままでした。孝の入院です。最初の肺炎という診断は、1カ月後には肺ガンに変わりました。しかもすでに末期で、もう手術はできないというのです。

日を追って、孝のからだの痛みは激しくなり、苦しみは増していきました。それなのに、孝はいつも笑顔を決やさず、お見舞いに来た人に冗談を言って笑わせ、圭に優しく語りかけ、長男や次男の前では強がり、看護婦さんに気を使い、毎日「ありがとう」「ありがとう」と繰り返し言っていたそうです。

しかし夫婦だけになると、孝は涙を流しました。「毎日、毎日、『主よ助けてください』と祈るのに、そのあとに『み心ならば』と言えない」と言って、泣いていたそうです。

ある時妻の博子が思いあまって、「あなたが早く帰って来てくれないと、圭がいるし、伸と望にもまだ手がかかるし、私だっていつまた倒れるかわからない」と言ったそうです。すると孝は微笑みながら、「それでいいんだよ。弱い所にこそ神様の力は現れるんだから」と答えたそうです。

召される前の日は、特に強いモルヒネを打ってもらい、からだの痛みをごまかしていました。危篤だという知らせを聞いて集まったたくさんの人々は、孝に会い、孝と話して、危篤というのは間違いだったのだと思ったそうです。

孝は、最後の最後まで笑顔で、「ありがとう」「僕は幸せだ」と繰り返し言い続けていたそうです。

1990年8月21日、夏の北海道・島松で、私の父のすぐ下の弟、私にとっては叔父である滝口孝が、この世での歩みを終え、神さまのもとに召されました。当時56歳でした。

葬儀の挨拶で、妻の博子はこう言いました。「悲しみはありますが、それよりもホッとしました。皆さんの前ではニコニコし、1人になると満足に呼吸もできずに苦しむ姿は、つらかったです。その苦しみから抜け出して、神さまのもとへ行ったのですから、本当にホッとしました」。

気丈にそう話した博子ですが、火葬場で遺骨になった孝を見ると、その場に泣き崩れてしまいました。

孝の死後、1本のカセットテープが出てきました。病室で誰もいない深夜に、とぎれとぎれの呼吸の中から録音されたものでした。

「おやすみなさい、神さま。きょう一日、あなたの導きをありがとうございました。命を、ありがとうございました。われらが働きを通してあなたの大いなるみ業に参加させてくださる恵みを確信して感謝をいたします。み子のあがない、血のあがない、子としてくださる恵み、それらを通して命にも勝る世界に、愛の世界にわれらを導き入れ、また用いてくださるその世界を感謝いたします。主よ、小さなものの全てをおささげいたします。み国を来たらせてください。全世界の苦しき、差別、おそれ、しいたげられた人々の上にも、神の世界、神の支配が来ますように。われらは全てそのために捧げて、活かしてくだ

さいますようお願いいたします。今宵、息が苦しく、絶え絶えの中でもまた主よ、み名を呼びたてまつります。苦しみの中に、限界の中に、わが働きたもう主が傍らにいてくださることを信じて、今宵休ませていただきます。

教会員一人一人、悩みの中にあるもの、課題を背負ったものを、主よ、顧みてください。これからの一人一人、一年、十年、何十年もかけて、その課題を背負う歩みと闘いを、主よ共にいて導いてください。

艱難は練達を生み出し、練達は希望を生み出す。主よ、そういう確信をもって歩ませてください。最も弱い者、最も苦しめられている者、その中において、主にある教会共同体を作り上げさせてください。み名はほむべきかな。勝利は主にあります。島松の一人ずつの群れを、主よ、どうぞ祝してください。みんなが祈りと力を合わせてこの一年近くを、祈り、信じ、望み、働いたこの自信を、主よ、どうぞ祝してください。み名に沿うものとしてください。本当に、主の群れです。すばらしい群れです。一人一人の魂は全世界の富よりも尊い。このことを証しすることができて感謝です。神さま、ありがとうございました。豊かな人生をありがとうございました。感謝をいたします。

博子どうもありがとう。長い間ありがとう。一緒に過ごした日々ありがとう。若い日の楽しい思い出をいっぱいありがとう。あなたの力を十分発揮してもらうことができなかった心残りあります。圭ちゃんを与えられて、一緒に歩んでくることができた。この中で学び、教えられ、力を合わせてくることができた。どんなにかたくさんのことを学び、力を付け、自信を与えられて、歩んでくることができた。本当に一緒に歩めてありがとう。楽しかった。しらべゆくものを圭ちゃんの中に、お互いの中に発見できた。ありがとう。今はたくましく、これからだって子供たちを委ねていく自信もできて、安心して逝きます。

圭ちゃん、ありがとう。聖書の新しい世界を見せてくれてありがとう。言葉がなくても、神さまとも、イエスさまとも、たくさんの友達とも、心が通じる世界を、圭ちゃん見せてくれました。圭ちゃんを通して北海道中にたくさんの友達を見つけることができて、出会えて、本当にお父さん幸せでした。お父さんの56年は幸せでした。

お父さん、お母さんありがとう。厳しい時代の中、命をありがとう。信仰をありがとう。すばらしい世界をありがとう。お父さんを越えられたかどうかわかりません。でも、いつもお父さんとお母さんが前にいてくれたことが、どんなに私の世界を豊かにしてくれたでしょう。捧げることの喜び、信じることの世界、委ねる世界、ありがとう。

兄貴、何べんも来てもらってありがとう。包まれた、支えられた思いをありがとう。その他の兄弟たち、ありがとう。病気になることを通して、また最後にみんなに会えてうれしかった。

教会のみなさん。島松の3年間、私にとっては10年も20年もみなさんと共に歩んだ、そ

のようにさえ思えます。今年のキャンプを終わって、みんなの感想を聞いて、ああ島松はもう大丈夫、もうこれで自分は死んでもいい、そんなふうに思えた。そのことは前にも話したと思います。神さまの造ってくださった自然、自然と共に、産んでくださった一人一人の魂のために共に暮らすこと、全世界の友の尊い命を共有すること、祭りを共にすること、主が命をかけてくださった、あの救いのみ業の賛美と礼拝。私のために殺されて、そして甦りたもうた主をほめたたえるあの豊かな礼拝、クリスマス、イースター、ペンテコステ、キャンプ。私たちが神の世界に、救いの世界に、自由の世界にはばたかせてくださる大いなる祭りに共に参加できる。そうです。神さまが託された新しい創造の世界。私たちは新しい共同の夢と、実践とを始めることができました。み国が来ますように。み心の天になるごとく、地にもなりますように。すみやかにそのことが、この地になりますように。さあ、みなさん、それぞれの人生、これから生きていくことになります。信仰と希望と愛の世界に、私たちは結ばれています。そのうち最も大いなるものは、愛であります。イエスさまは、あなたのために、あなたの苦しみのために、あなたの闘いのために、流された血のために、そうです、そのことのために、主は代わって殺されてくださいました。死んだものの甦りではありません。殺されたものの甦りです。あなたのために、あなたのために、そしてあなたのためにも、主は殺されてくださったのです。何ということでしょう。神のみ子があなたのために、あなた自身のために、あなたの差別、悲しみ、苦しみ、絶望、そしてあなたを生かすために、死んでくださったのです。

決してキリストの死を無駄にしてはなりません。生きてください。闘ってください。隣にいる、悲しみの人のために涙を共に流しましょう。その人への非難を一緒に受けましょう。苦しみを半分こしましょう。喜びもまた、半分こいたしましょう。自分の命を超えたすばらしい世界が、復活の命の世界が、神さまが喜んでくださる世界が、そこに開けてきます。殺されたものは甦らせていただきます。命の世界です。ハレルヤ。主と共にある世界、主の支配したもう世界、そのような世界に、三位一体の世界に、私たちもまたつながらせてくださいます。しかし、これはまだ闘いの過程であります。永遠への過程でもあります。しかし、同時に、すでに主がかなえてくださった世界でもあります。私たちは、私たちのこれからの闘いのスタートに今立っています。一日一日を、主に委ねましょう。思いわずらうことを一切やめなさい。心にある思い、願い、全てを主に申し上げなさい。そうすれば、人知を遥かに超えて、かなえてくださる主の平安が、平和があなたを支配するでしょう。闘いの最中、涙、吐息、挫折、暗いことの中に私たちを引き込む、不安が襲ってきます。人間であることです。弱さの中にこそ、神さまが入ってくださる入り口があります。強がることはやめましょう。弱さを、神さまは用いてくださいます。弱さを大事に見つめているときに、弱さを守りとおそうとする、そのような思いの中に、主は最善をそこに為し、また見せてくださいます。

きょうはここでおやすみします。神さま、騒いだ心を鎮めてくださって、ありがとうございます。ありがとうございます。今は、生きるも死ぬも、あなたに委ねて、今宵を休ませていただきます。主のみ名によって祈ります。アーメン。(略) おやすみなさい神様」。